

第9回 全国聖書科研究集会

青山学院の キリスト教教育

レポート

特に印象的だったのは、守り続けることへの強い授業開始の祈りだった。思いを感じた。(2)では、黙祷の中、聖書を開ぎて、せずにその日の当番の生徒が読む。教師からの「今日はどんな声が聞こえておられるか」という問いに、友人を入れておられるこ

通の課題を分かち合つた。一日目の講演の講師は、国際基督教大学の大川洋先生。「キリスト教教育と道德教育」と題し、教部長であるシーウッドにて、道德の教科化について語られた。この課題をカトリックとプロテスターが、同じ空間で分かち合えたことに大きな意味があった。(上巻参照)

二日目はまず青山学院中等部の授業見学。私身は中3の聖書科の授業を見学させて頂いた。授業開始の祈り、生徒の発表(この日は臘器移植について)、聖書からのメッセージ、生徒への問い合わせる問題を分かち合つた。一日目の講演の講師は、国際基督教大学の大川洋先生。「キリスト教教育と道德教育」と題し、教部長であるシーウッドにて、道德の教科化について語られた。この課題をカトリックとプロテスターが、同じ空間で分かち合えたことに大きな意味があった。(上巻参照)

青山学院のキリスト教教育、②キャンパスミニストリーの制度、③大学のキリスト教教育、について語られた。①では「青山学院の教育は永久にキリスト教の信仰にもとづいておこなわなければならない」という青山学院の寄附行為について触れられた。「永久」という言葉やその後に続く細則などから「建築の精神性の関係のあり方にについて考させられた。

2014年11月24日～
25日、青山学院会場にて
2014年度第9回全国
書畫科研究集会が行われ
た。特に一日目は、キリスト教教育懇談会第12回
講演会に合流し、日本力
の課題を専門教師が
えてくるかよ～聞きま
よう」との問い合わせに
は、聖書を読ませるで
はなく、神の声を聞かせ
るという青山学院の姿勢
が見えた。また生徒に折
りの課題を専門教師が

研究集会

の責任を強く感じさせられた。
③では「宗教セミナー」がもつ意味で大き
なヒントが与えられた。
「どんな行事をするか」ということに関心がいき
たがちだが、キャンパススマートリーの核とな
ったのが、OB・OGたちの「セミナー」だ。
このことは、二ストリーの核となる要
生・生徒・児童の「懇親会」や「講演会」など話題にな
った青山学院大学り揚」としての「セミナ

今さら聞けない… キリスト教Q&A

西田惠一郎

事務局だより

1月は暦月とも言へ、始まりの月に相応しい響きを感じます。冬來たりば、春遠か
らじと願う日々、願う日々は待つ日々でもあります。
人では如何ともしがたいことは知るもので、同時に、自身が一人で何を知らざる時でもあります。

クリスト教学校教育同様が法人格を備えて、初日には感じることもあるのです。
日々に感じることもあるのです。
新しい連携に関するプロジェクト委員会と「道徳教育」に関するプロジェクト委員会との発足の了承を得て後、この機関紙でお知らせいたしますが、使命の実践として具体的に何が動くのか、いたしましょう。

昨年でしたが、多くの人で、それその地で、学校で、絶望しそうになつた思いもしない何かが起

て、第一陣として、新たに

Q 「受肉」とは?

A 「初めに言があった」(ヨハネによる福音書1章1節)。「言」は旧約では神の能力と活力を記述するために用いられ、イエスの時代ではギリシア語で「創造」や「癒し」を意味しました。ギリシア哲学でもよく知られた概念で、神の代行者をさえ意味したようです。「神と言は本質において一つであった」ということです。この「肉となつて、わたしたちの間に宿られた」(ヨハネ1章14節)言が神の独り子イエス・キリストであるという真理が受肉で、その目的は「神を示す」(ヨハネ1章14節)ことでした。

このイエスを洗礼者ヨハネは命懸けで語り、そして福音書記者のヨハネは書物という形で伝えました。「これらのがことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けたためである」(ヨハネ20章31節)と記されていました。

カンタータ・ソプラノとオルガンのための「或るクリスマスの出来事」(作詞: 佐久間彪/作曲: 新垣トシ)は、この真理を的確に示しています。教会から離れていた一人の老農夫が渡りの途に迷った鳥たちを助けるために鳥になれたらと願っている自分に気付き受肉の意味を悟ります。ま

た、「学生サンタ」(『世界中から集めた深い知恵の話100』マーガレット・シルフ編／中村妙子訳)では、サンタの衣装を付けた学生アルバイトが怖がった子どもをなだめようと衣装を脱ぎ、昔、神様がこの世に降って人間と一緒にいようとして下さった、誰も怖がることがないように赤ん坊として、と話します。子どもとは対照的に期待外れとがっかりした親は子どもの手を引いて去ってしまいます。

イエスに軍事的・政治的王を期待した人々は彼に落胆しました。そして遂に十字架につけてしまします。「世は言を認めなかった。…受け入れなかった」(ヨハネ1章10, 11節)のです。受肉はつまづきの元だったのです。イエス自身が「このごとにつまづくのか」(ヨハネ6章61節)と弟子たちに言っているほどですから。この真理を証言したために洗礼者ヨハネも福音書記者ヨハネも迫害されました。

今の時代、このような迫害を受けることはないでしょう。しかし、わたしたちの証しの言葉が拒絶されることはあります。「わたしを遣わした父が何に寄せてくださらなければ、だれもわたしのもとへ来ることはできない」（ヨハネ6章44節）ことを覚え、落胆することなく人となられた神の子イエスを伝え、またこの方との交わりに生きる者でありたいと願います。